

INT. タクシー – 夜

都内を走る抜けるタクシー。酔っ払ったユマは俊也の肩にそっともたれかかりネオンサイン照らされた彼の顔を見上げる。

なだれ込むように俊也の膝に横たわり、空を見上げるユマ。

ユマ

「地球以外の惑星の話、聞いたことありますか？」

俊也

「例えば？」

ユマ

「小さい頃、学校の先生が話してくれた。
宇宙には地球みたいな惑星が沢山あって、
人間みたいな生物が生きてるって」

ゆっくりと空を見上げる俊也。

ユマ

「何光年も離れたその惑星から見る私達の一生って、
彼達にとって数ヶ月かもしれないんだって。
ひょっとしたら私たちの人生は、
夏休みの間に育てる植物みたいな存在なのかもね」

俊也の足をぎゅっと握るユマ。

ユマ

「俊也さんのこと好きです」

突然の告白にどう返答すれば困る俊也を察するユマ。

ユマ

「私のこと、どう思ってますか？」

俊也

「ごめん。いますぐ返事できない」

悲しい瞳で空を見上げる俊也に気づくユマ。

運転手
「着きましたよ」

ユマのマンションの外にタクシーがとまる。

俊也
「本当にここで大丈夫？」

ユマ
「はい。今日はいろいろありがとう。楽しかった」

愛おしい眼差しで俊也を見つめるユマ。